

国

語

(二〇二五年度)

《注意》

- 一 試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。
- 二 問題用紙は十四ページまであります。解答用紙は一枚です。
試験開始の合図があつたら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっているかを確かめ、次に、解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号」を記入しなさい。
- 三 試験中は、試験監督かんとくの指示に従いなさい。
- 四 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為こういとみなすことがあります。疑われるような行動をとってはいけません。
- 五 試験終しゅうりよう了の合図があつたら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 六 試験終了後、試験監督の指示に従い、解答用紙は裏返して置きなさい。
- 七 試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章を読み、設問に答えなさい。

ウミガメの産卵地として知られていた徳島県姫ヶ浦に住む十三歳の沙月は、年の離れた姉の末月が四年前に都会に出て行つて以来、祖父と二人で暮らしていた。ある日、沙月は四年ぶりに姫ヶ浦で産卵されたウミガメの卵を盗むが、そのことは七十代のウミガメ監視員・永井佐和に気づかれていた。一方、浜辺で物を拾う「ビーチコーミング」を趣味とするカナダ人のティムは、カナダの浜で見つけたウミガメに付けられていたタグの標識番号をたよりに、姫ヶ浦を訪れていた。ティムが見つけたのは、四年前に自分たちが育てて海に放つたウミガメであつたことに、沙月と佐和は気づく。

「佐和さん、黒潮見たことありますか」

海岸堤防のてっぺんに並んで立つて、沙月は訊いた。日はもう西の岬のほうへ傾き始めている。夕風前の海風が、火照つた頬に涼しい。もう夏も終わりだ。

「あるよ、なんべんか」

佐和は海の向こうを見つめて言った。水平線の向こうで立ち上る入道雲は、西日で金色に輝く頭の部分が風に流れて空に溶け込んでいる。

「子どもの頃、近所の漁師さんに船に乘せてもろて見たんが最初かな。それから、定置網に引っかかったカメを父と船で引き取りにいったときにも見たなあ。そのときは、潮の境目がはっきりわかって、向こう側が濃い藍色なんよ」

「やつぱり、藍色なんですネ」

「太平洋を北のほうから来る海流に、親潮いうのがあるでしょ」

「ああ、習いました」

「父から聞いた話やけど、親潮は栄養分が多いけん、プランクトンがようけ繁殖するんやて。潮の色も、緑とか茶色がかつた色になるらしいんよ。黒潮は反対に、栄養が少ない分、透明度が高くなる。ほなけん、青黒う見

15 えるんやて。藍染めの染め液が入った藍甕あいがめなんかよりもっと、深い深い藍色やね。そこに白い波頭なみげしらがざわざわ

ーっと流れとつて。ほんまに、大海原おおうなばらの中の大きな川みたいやった」

「おじいちゃんも、おんなじこと言うてました」

「①あの子も、あの潮にのつて海を渡わたったんやねえ」

どこかまぶしそうに目を細める佐和の横顔に、沙月は言った。

20 「佐和さん……ごめんなさい」

「ええんよ、あれで」

「でも——」

「わたし、何一つ嘘うそはついとらんしね。あの子を飼うてるうちにかわいいになつてきたのも、ほんまのこと」

25 それでも佐和が、あの二人の前で一番大きな事実を隠かくしたことに変わりはない。沙月をかばい、自分だけを悪者にして。

四年前、浜に取り残されていた子ガメを見つけたのは、沙月だった。

当時小学四年生。夏休みも終わりに近い、ある日のことだ。その三日前の夜中に巣穴から子ガメたちが脱出だつしゅつしたことは知っていた。脱出の翌朝には、子ガメたちが海まで懸命けんめいに進んだ無数の小さな脚跡あしあとも見にいつていた。

30 その日は朝から曇り空で、今にも雨が降り出しそうだった。朝食を済ませるとすることもなく、外へ出ると足は海岸に向いていた。

海はうねりが高く、打ちよせる波も荒い。空になった巣穴の様子を見てから通り過ぎ、東の岬に向かって歩いていると、足もとで砂に半分埋まった白いレジ袋レジふくろがもそもぞと動いた。風のせいにしては動き方がおかしい。

カニでも入っているのかと思い、しゃがんでのぞき込むと、なんと子ガメだ。

35 巣穴からは東に百メートル以上離れた場所だった。今思えば、あの子ガメは生まれつき少し方向音痴おんちだったのかもしれない。

すぐに袋から出してやった。沙月の手より小さな黒っぽい体は、甲羅こうらまでやわらかい。真ん中がでこぼこした甲羅の脇わきをそとつかむと、子ガメは体の割に大きな前脚まえあしを震ふるわせた。

頭を海に向けて砂の上に置いてみた。前後の脚を弱々しく動かすだけで、まったく進めない。かなり衰弱すいじやくしているようだ。直接海に入れてやろうかとも考えたが、白くaマいたあの波を越えていけるとはとても思えな

40 った。

このままでは、この子は死んでしまう。一緒に生まれた仲間たちは海へ出て行ったのに、一人置いていかれたこの浜で命が尽きてしまう。

誰か大人を呼びにいこうとは考えなかった。自分が助けるのだ。沙月はその一念だけで、レジ袋を砂から掘り出し、そこに子ガメを入れて持ち帰った。

45 海水をためた洗面器に子ガメを入れて、裏庭の隅に隠したものの、九歳の沙月には飼う方などわからなかった。ごはん粒や金魚のエサを与えてみても、食べようとしなない。三日もすると、子ガメはほとんど動かなくなってしまう。

何もできないくせに連れて帰った自分のせいだ。助けるどころか、このままではこの子を殺してしまう。

沙月は洗面器を抱え、泣きながら佐和の家を訪ねた――。

50 「佐和さんは、②なんであのか、役場に連絡しようって言わなかったんですか」それは、ずっと訊いてみたいと思っていたことだった。

「なんでやるねえ」佐和は少し間を置いて、続ける。「うちの玄関で洗面器抱えた沙月ちゃんがね、しゃくりあげながら何回も言うたんよ。この子ガメだけ置いていかれたの。置いていかれた子ガメが死にそう。置いていかれた子ガメやから助けない」

55 「え……覚えてません」

「それ聞いてね、ふと思たんよ。この子ガメは、沙月ちゃんなんやなって」
「あたし――？」

「未月ちゃんが出ていったの、あの年の春やったでしょう？ お姉ちゃんがおらんようになってから、沙月ちゃん、ほんまに元氣なくなってたから」

60 ③この子ガメは、沙月ちゃん――。

佐和の言葉が耳の奥でいつまでも響いて、沙月は小さく震えた。

震えているのは、九歳の自分だ。姉に置いていかれて、誰もいない浜に一人立ちつくし、涙をためた瞳を揺らしている。それを今初めて、十三歳の自分が抱きしめる。あのかとき誰かにそうしてほしかったように。

沙月は、やっとわかった気がしていた。なぜあのかとき、子ガメを持ち帰ったのか。そしてなぜ今また、卵を盗

65 んでまでそれを孵かえそうとしているのか。

姫ヶ浦のウミガメを保護したいわけではない。数を増やしたいわけでもない。ただ、④自分の子ガメをこの手で海に放ちたいだけなのだ。

そしてその子ガメは、沙月の代わりに姫ヶ浦を出ていく。

黒潮にのつて、果てしなく広い海へ。

想像もつかないような、遠い世界へ。

「あの卵が孵かえつたら」佐和が言った。「今度は一人で育てるつもり？」

「え、ああ……」すぐには答えられなかった。

四年前は、二人で育てた。

75 佐和に教わってサバとイカをすり身にしたものを与えてみると、子ガメはそれを少しずつ食べ始め、だんだん元氣を取り戻もとした。やがて、沙月が水に人差し指を入れるだけで大急ぎでぱちやぱちやと泳いできて、小さい口で囓かんでくるまでになったのだ。

二学期が始まって、毎朝佐和の家に寄ってエサをやった。学校が終わると真っ先に子ガメの様子を見に行く。休みの日には海水の交換こうかんと、飼育容器の掃除そうじを欠かさなかった。月に二度は歯ブラシで甲羅を磨みがいてやる。冬を迎むかえる頃には甲羅の長さが十センチほどになり、翌年の夏までには二十センチを超えた。

80 ※₃ ヘッドスターティングをやってみようということは、二人で決めた。タグがあるから付けて放そうかと言いつ出したのは、佐和だ。「この子のお守りになるかもしれないけん」と言っていたが、今ならその意味がよくわかる。

放流したのは、七月初めの波の静かな夜明け前だった。波打ち際なみうちぎわであの子を砂の上に置いたときは、涙が出た。さざ波の中にあつという間に消えていくのを見つめながら、沙月は「元氣だね」と言った。佐和は「いつてらっしやい」と手を振ふっていた。

85 「なあ、沙月ちゃん」佐和が海を見つめたまま、いつもの穏おだやかな声で言う。

「もう、ええんやない？」

沙月はゆつくりと、佐和の横顔に目を向けた。何がもういいのかは聞き返さなかった。そんなことは、ここへ来たときからわかっていた。

「あの子がちゃんと海を渡ったことが、元氣にしよることが知れたんやけん。今ならまだ間に合う。卵は巣穴に

*

満月が正面から浜を明るく照らしている。
海面のほう空よりわずかに暗く、遙か向こうで黒く浮かび上がった水平線が、浜の両端から突き出た岬の影とつながっていた。

心地よいリズムで打ち寄せる波も穏やかで、bゼツコウの脱出日和だ。もちろん、そう思うのは人間の勝手に、子ガメたちが今夜出てくるかどうかはわからない。

沙月はそつと巣穴に近づいて、その様子を確かめた。

まだ変化はない。表面がすり鉢状にくぼんでいるのは、卵を割って地中に出てきた子ガメたちが、少しずつ砂を掘って地表へと進んでいる証だ。地中にその空隙が広がって、上の砂が落ちていいるということらしい。

⑤沙月が持ち出した五個の卵は、佐和と一緒に、あの日の夜中に巣穴に戻した。どうかそれも無事に孵つてくれていますようにと、今日一日祈り続けている。

十メートルほど向こうに並んで座っている佐和とティムのもとへ戻り、「変化なしです」と報告する。
ティムが腕時計を見て言う。「子ガメたち、止まりましたね」

今、夜中の十二時五分。三十分ほど前までは、少しずつ巣穴のくぼみが大きくなっていたのだ。

「地面のそばまで上がってきたら、そこでいったん待機するんやて」佐和が言った。「砂の温度が十分下がったら、夜になったと判断して、一斉に出てくるいうよ」

今朝、巣穴の上がわずかにくぼんでいることに気づいたのは、佐和よりも早い時間に浜を散歩していたティムだ。ティムが佐和に、佐和が高嶋課長に連絡して、すぐにネットの囲いが取り外された。もちろん、脱出した子ガメたちの邪魔にならないようにだ。夕方までは、高嶋もここにいた。

ティムはあれから、高知との県境にある海陽町まで海沿いを旅していたそうだ。どうしても子ガメたちの脱出が見たいからと、昨日姫ヶ浦に戻ってきていた。

「——So beautiful」満月に照らされた浜を見つめて、ティムがつぶやいた。

「徳島、気に入ってくれたんかしら」佐和が訊く。

「はい、とても。^{※5}大津^{おつ}もいいところ。でも私、海の近くで育ちましたから、海あるほうがいいです。徳島の海、素晴^{すば}らしい。ポケットビーチたくさんあって、すごきれい」

「それはよかったわあ」

「大津の次は、徳島住みたいと思ってます。姫ヶ浦もいいね」

ティムは以前、「これからしばらく、日本人ね」と言っていた。「しばらく」ということは、日本に永住したいというわけではないのだろう。何となくだけれど、世界中を放浪^{ほうろう}するような生き方が彼^{かれ}には似合っていると、沙月は思った。

だとすれば、⑥この人にとって故郷とは何だろう。沙月にはそれを直接問う勇氣はなかったが、せめてヒントが欲^ほしくて、口にしやすい質問をした。

「ティムさんは、なんでそんなに日本が好きなんですか。子どもの頃から日本に興味があつたって言うてましたけど」

「だって私、日本人似てるでしょう？」ティムは自分の顔を指差す。「前、永井さんもそう言いましたね」

「え、そんな理由ですか」

「そうそう。結構本気で、そんな理由」

ティムはいたずらっぽく笑うと、静かに語り始めた。

「私のふるさと、ハイダ・グワイ、『人々の島』という意味です。でも実際は、森ばかりの島。レッドシダーという大きな木の、深い森です。地面は全部、緑の苔^{こけ}のカーペットね。シカ、クマ、たくさんいる。海にはアザラシ、クジラもやってきます。自然は徳島より少し、ワイルドかもしれない。でも昔は、たくさん人々住んでました。ハイダ族です」

「ハイダ族？」

「そう、ネイティブ・アメリカン。アメリカ先住民族の一つです。私、父はアイルランド系。でも母は、ハイダ族の人です」

「へえ、どうりで」佐和が得心^{※7}したように言った。「アメリカ先住民いうたら、日本やら中国やらモンゴルやら、アジアの人とご先祖が近いみたいやもんねえ」

ティムがうなずく。「ハイダ族、数は減りました。でも彼らの村、今もハイダ・グワイにいくつかあります。芸術とか文化もたくさん残ってる。有名なのは、トーテムポールね」

「ああ、あれの本場ですか」佐和が手を打った。「昭和の頃はね、日本の小学校にもようけあったんよ、トーテムポール。子どもたちが卒業記念に作ったりしてね」

「知ってます。それ聞いたときは、びっくりしました。なんで日本の小学生が？　って」ティムが可笑しそうに肩をすくめる。

話についていけない沙月に、ティムが教えてくれた。

トーテムポールというのは、北アメリカ北西海岸の先住民族、ハイダ族、トリンギット族、チムシアン族などで作られる彫刻柱だ。氏族や集団の紋章やルーツ、伝説にまつわる動物や自然物がレッドシダーに刻まれ、地域や様式によつてはカラフルに着色される。高いものでは三十メートル前後にも及び、家や集会所、cボチなどに立てられるという。

「ハイダ・グワイには、⑦すごく古いトーテムポール残ってます。たぶん何百年も前の。傾いて、折れて、苔だらけ。色も消えてる。そんなものがまだ、深い森の中に立ってます。島には何千年も前から人々が住んでいた、いわれてますから」

「朽ちたトーテムポールがひっそり残る森やなんて」佐和がうつとりした声を出す。「想像しただけで、神秘的やねえ」

「古い貴重なものなら、放つたらかしにせんほうが」沙月は思ったことを素直に言った。ハイダ族の人々が減っているのなら、なおさらだ。

「Hum」とティムがあごひげを撫でる。『サケが森をつくる』——北西海岸のネイティブ・アメリカンのことわざです。海から川をのぼってきたサケ、産卵して死にますね。たくさん死骸が栄養になって、森をつくる。人間はその森の木で、トーテムポール作る。作ったら、それで終わり。あとは自然にお任せね。腐って、土に還る。それが海まで流れたら、サケの栄養なるでしょう。それが、ハイダ族の考え方です」

「すべては巡る、いうわけや」佐和が言った。

「そう。いつか誰かが森の中で、朽ちたトーテムポールのかけら見つける。ああ、大昔はここにも人が住んでいたのか、思います。それで十分。サケも森も木も、全部借りた物。もちろん、土地もね。だから、人間も流れてい

く

「流れていくって？」沙月はよく意味がつかめず、聞き返した。

「例えば——」ティムがゆったりと間を取って、続ける。

「私が子どもの頃、母がよく話してくれました。母が村の長老から聞いた、ハイダ族のdデンシヨウです。遠い遠い昔、ハイダ・グワイの北にある島に、遠い遠い海から人々が流れ着いた。人々のリーダーは、姉妹でした。お姉さんのグループは島に残って、トリンギット族になった。妹のグループはハイダ・グワイにやってきた。それが、ハイダ族の祖先です」

ティムの低く穏やかな声が、静かに響く波音と溶け合う。沙月はそれに包まれながら、暗い海の向こうに丸太の小舟に乗った人々を思い浮かべた。それぞれに櫂を握り、月の光を浴びて、大海原へと漕ぎ出していく——。

「母は私に言いました」ティムが続ける。「その姉妹たち、日本から来たに違いない」

「え、なんでですか」沙月は驚いて訊いた。

「ハイダ・グワイのビーチ、ほんとにたくさん、日本のもの流れ着くからです。私のビーチコーミングのコレクション、日本のものばかり。漢字の看板、漁の道具、片仮名のボトル」

「へえ、ほうなんやね」佐和が言った。

「海流のせいです。黒潮のつて、北太平洋海流のつて。北アメリカの西岸まできたら、北と南に分かれる。南のカリフォルニア海流のつたら、メキシコとか暖かいほうへ。北のアラスカ海流のつたら、ハイダ・グワイとおつて、アラスカへ」

佐和と育て、海に放ったあの子ガメもだ。沙月は思った。

あの子もきつと、やつとの思いでたどり着いた北アメリカの西岸で、進む方角を間違えたに違いない。南に向かうべきところを、北行きの海流にのってしまったのだ。

「だから私も、半分信じてます」ティムが口角を上げる。「私、日本人の血が流れてる。だからどうしても、日本来たかった。遺伝子が、ここへ呼びました」

「Aウミガメとおんなじやね」佐和も微笑んだ。

数千年ぶりの、母浜回帰。

そんなことが、本当にあるのだろうか——。

⑧ 沙月は一人黙って膝を抱え、じつと水平線を見つめていた。今度はタイムが巢穴をチェックしに行った。するとすぐに小さく声を上げ、大きな身振り（みぶ）で早く来いと手招きする。

弾けるように立ち上がった沙月は、佐和の手を引っ張って立たせると、一緒にタイムのもとまで走った。すり鉢状の巢穴の底で、子ガメが一匹（ひき）、必死で前後の脚を動かして斜面（しゃめん）を這（は）い上（あ）がろうとしている。そのまわりの砂ももぞもぞと動き、二匹（ひき）、三匹（ひき）、四匹と顔を出す。その数はみるみるうちに二倍、三倍に増え、大混雑になった。

ぱたぱたと前脚を振って押し合（お）いへし合（あ）い、前の子ガメの背中（せなか）を乗り越（こ）えながらすり鉢の外へ出ていくと、皆（みな）が迷わず同じ方向へ進んでいく。もちろん海の方（ほう）向（か）だ。

脱出した子ガメが習性として目指すのは、海が照り返すわずかな光だ。だから、浜では決して明かりを使（つか）ってはならない。

いったい何匹（なん）出てきただろう。五十匹ではすまない。とても数え切れないけれど、感覚的には百匹近くいるように思える。群れは少しずつ広がって、進んでは止まり、止まっては進んで海に近づいていく。

沙月は佐和の横で、子ガメたちから十分距離（きょり）をとりながらそれを見守った。タイムは群れをはさんだ向（む）こう側にいる。

先頭集団が波打ち際に達した。砂が水分（みづ）を含（ふく）んで進みやすくなったのか、急にスピード（スピード）が上がる。数匹がついに、寄せる波にさらわれた。いったん押し戻（お）された小さな体が、引き波とともに一瞬（いっしゆん）で水の中に消えていく。そこから先は、月明かりでは見えない。

人間にはほんの小波（なみ）でも、子ガメたちにとっては大波だ。怯（ひる）むことなく次々とその中へ突（つ）っ込んでいく彼らを見つめながら、沙月はぼつりと言（い）った。

「⑨ この子たちみんな、勇氣（ゆうき）ありますね」

この海の向（む）こうに、何があるかわからないのに。

待ち受けているのは、きつと大変な試練（しれん）ばかりなのに。

「ほうやね」佐和（さわ）が言う。

「あたしは、怖い（こわ）いです。お姉ちゃんみたいにここを出ていくのも、出ていかんのも」

「高校を卒業するまで、まだ五年もあるやない。ゆつくり考えたらええんよ。ほうや、あの手帳——⑩あの子の標識番号が書いてある手帳は、そろそろ沙月ちゃんに預けようかな」

「え、でも……」

あの子ガメがこの浜に帰つてくるとしても、それは三十年後だ。そのとき自分がどうなっているか、姫ヶ浦にいるかどうかなどわからない。

「ええの」佐和が小さくかぶり＊11を振る。「沙月ちゃんがどこにおつても、何をしようつても。持つとるだけでええのよ。あの子に付けたタグと一緒に、お守り代わり」

「お守り——」

「それにね。ほんまのこと言うたらわたし、あの子がもしメスでも、姫ヶ浦に帰ってきてほしいとは思とらんよ」佐和は、砂浜すなはまを懸命に進む子ガメたちに目を落とす。「あの子だけやのうて、この子らも」

「どういうことですか」
「どの浜に帰るかは、カメさんたちが決めること。気に入った浜には帰るし、気に入らん浜には帰らん。保護したいとか、増やしたいとかいうても、人間はまだそこまでウミガメのことを知らん思うんよ。人間の考えるとおりに、なかなかならん」

佐和は顔を上げ、月明かりに浮かぶ浜をゆつくりと見渡す。

「残念なことやけど、今の姫ヶ浦からはもうじき、ウミガメはおらんになる。でも、浜はずっとこのままやない。いつか誰かが何十年かかけて、昔みたいなええ浜に戻すかもしれへん。反対に、もし姫ヶ浦が誰からも見捨てられても、何百年後かには浜も自然ときれいになつとるやろ。そしたらカメさんのほうで、勝手にこの浜を見つけてくれる」

「何百年後……」

「気の長い話やけどね」と佐和は笑った。「人間も、同じや思うんよ。好きなどころで、気に入った場所で、生きたらええの。生まれた土地に責任がある人なんて、どこにもおらんよ」

⑪沙月の胸に、熱いものがこみ上げてくる。それを察した佐和が、沙月の腕うでに優しく触れた。

【「さっきのティムさんの話やないけど、姫ヶ浦が皆から忘れ去られても、いつかまた、誰かが見つけてくれる。B 速い記憶きおくを頼りに、帰つてきてくれる。黒潮にのつて、⑫ティムさんみたいな人がふらつと流れ着いたりして

ね

そのティムは、波打ち際にしやがみ込んで靴を水に濡らしながら、海の中に消えていく子ガメたちを見つめている。その眼差しは本当に、ずっと昔からここでウミガメを見守り続けてきた人のもののように見えた。

だから、それでいいのかもしれない。

ずっと、ここにいらなくてもいい。ここでウミガメを待ち続けるのは、自分じゃなくてもいい。いつか自分が、この子ガメたちのように姫ヶ浦を出ていったとしても、この浜で育った思い出が消えることはない。たとえ、二度とここへ帰ることがなくても。

⑬あたしの記憶はきつと、藍色の潮にのつて、この浜へ帰る。」

(伊与原新「藍を継ぐ海」より『藍を継ぐ海』所収)

〈語注〉

※1 藍染め：藍という植物を用いた染め物。

※2 あれ：本文以前の場面で、町役場のウミガメ担当部署の課長である高嶋が、ティムとともに佐和のもとを訪れ、ティムが見つけたウミガメについてたずねた。その際に佐和が、個人でウミガメを飼育することは禁じられているにもかかわらず、自分が世話をして放流した、と話したこと。

※3 ヘッドスターティング：子ガメの生存率を高めるため、一定期間人間の手で育ててから放流すること。

※4 So beautiful：「とても美しい」という意味。

※5 大津：ティムが現在住んでいる滋賀県の地名。

※6 ポケットビーチ：小さな海岸。

※7 得心した：納得した。

※8 Hmm：考え込んでいるときに出る声。

※9 口角を上げる：「口角」は口の両はし。ここでは笑顔を見せることを表す。

※10 母浜回帰：成長したウミガメのメスが、産卵のために生まれた浜に戻ってくることに。

※11 かぶりを振る：頭を左右に振ること。

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 ― 線①「あの子も、あの潮にのつて海を渡った」(18行目)とありますが、「あの子」とは何を指していますか。本文の1～49行目から十三字でぬき出しなさい。

二 ― 線②「なんであるとき、役場に連絡しようって言わなかったんですか」(50行目)とありますが、「あるとき」とはいつの、どのようなことがあったときですか。説明しなさい。

三 ― 線③「この子ガメは、沙月ちゃん――」(60行目)とありますが、このようにいえるのはなぜですか。子ガメと沙月、それぞれの状況がわかるように説明しなさい。

四 ― 線④「自分の子ガメをこの手で海に放ちたい」(66～67行目)とありますが、沙月がこのように思うのはなぜですか。説明しなさい。

五 ― 線⑤「沙月が持ち出した五個の卵は、佐和と一緒に、あの日の夜中に巣穴に戻した」(102行目)とありますが、沙月が自分で卵を孵す必要がなくなつたのはなぜですか。説明しなさい。

六 ― 線⑥「この人にとって故郷とは何だろう」(123行目)とありますが、沙月がこのような疑問を抱いたのはなぜですか。説明しなさい。

七 ― 線⑦「すごく古いトーテムポール」(151行目)とありますが、これについて沙月とティムはどのように考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア 貴重なものならば詳しく調査して技術を後世に伝えていくべきである、と沙月は考えているが、丈夫に作られているのでいつか誰かに見つけてもらえるよう放っておけばよい、とティムは考えている。

イ 貴重なものなのでそのまま放置せず人間が適切に管理した方がよい、と沙月は考えているが、すべては自然から借りた物なので人間が作った物も自然の循環に委ねておけばよい、とティムは考えている。

ウ 貴重なものだと皆が思い込んでいるだけなので保存する必要はない、と沙月は考えているが、地域ごとに異なる彫刻はそこに住んでいた人々の生活様式を示す重要な史料になる、とティムは考えている。

エ 貴重なものであるうえにハイダ族が減っているのならばなおさら保護するべきだ、と沙月は考えているが、ハイダ族を守りたいならばむしろ食糧となるサケの栄養にすればいい、とティムは考えている。

八——線⑧「沙月は一人黙って膝を抱え、じつと水平線を見つめていた」(190行目)とありますが、このとき

の沙月についての説明としてふさわしいものを、次のア、エの中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア ウミガメが長い年月を経て生まれた場所に帰ってくるだけでも驚くべきことなのに、人間が遠い場所から先祖の記憶をたどって起源に戻るようなさらに雄大な時間のありようにふれ、思いにふけっている。

イ ウミガメにどんなに遠くに行っても卵を生むために戻ってくる習性があることは分かっていたが、人間も子孫を残すために遠くの仲間と再会しようとするという生命の神秘にふれ、心を打たれている。

ウ ウミガメですら海流を間違えて思いがけない場所にたどり着くことがあると初めて知ったので、人間が一度生まれた場所を離れてしまえば戻ってくることは難しいという現実には思い至り、恐れおののいている。

エ ウミガメは自らの力で海を越えて厳しい自然の中で自由に生きる存在であると気づいたことで、人間がウミガメを自分たちと重ねて考えたり保護したりすることの傲慢さに思い至り、深く反省している。

九——線⑨「この子たちみんな、勇気ありますね」(210行目)とありますが、沙月がこのように思うのはなぜですか。沙月の状況をふまえて説明しなさい。

十——線⑩「あの子の標識番号が書いてある手帳は、そろそろ沙月ちゃんに預けようかな」(215、216行目)とありますが、このときの沙月に対する佐和の思いはどのようなものですか。説明しなさい。

十一——線⑪「沙月の胸に、熱いものがこみ上げてくる」(237行目)とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

十二——【】の部分(238行目、247行目)について、以下の問いに答えなさい。

(1)——線⑫「ティムさんみたいな人」(239行目)とありますが、どのような人のことですか。~~~~線A「ウミガメとおんなじやね」(187行目)、~~~~線B「遠い記憶を頼りに、帰ってきてくれる」(239行目)をふまえて説明しなさい。

(2)——線⑬「あたしの記憶はきつと、藍色の潮にのって、この浜へ帰る」(247行目)とありますが、沙月自身は姫ヶ浦に帰らなくても、沙月の「記憶」が「藍色の潮にのって、この浜へ帰る」というのはどういうことですか。【】の部分をよく読んで、沙月がそのように思った理由を明らかにしながら説明しなさい。

十三 〓 線 a 「マ」(39行目)、b 「ゼツコウ」(97行目)、c 「ボチ」(149行目)、d 「デンショウ」(168行目)
のカタカナを、漢字で書きなさい。

〈問題はここで終わります〉

受験番号	
氏名	

(2 0 2 5 年 度)

国語解答用紙

八	七	六	五	四	三	二	一

十三	(2)	十二 (1)	十一	十	九
a					
b					
c					
d					

	(合 計)
--	-------

	(整理番号)
--	--------